巻　頭　言

にいがた土地改良の30年問題

新潟県農地部　技監　　坪谷　満久

年明け早々大雪にも見舞われ、また例年になく寒かった冬を過ごし春が待ち遠しい中、県内の田んぼも早いところでは農作業が始まる時季でしょうか。

さて、平成30年からコメはどうなるのか、農政が大きく転換する年になるのでしょうか。減反廃止という響きに、作りたいだけコメを作っていいと考える農家がいないこと、生産や米価への影響が少ないことを願っています。ただこれまで新潟県ではコメにこだわり、全国のコメ生産をリードし、ブランド米を育ててきたことに異論の余地はなく、我々生産基盤の担当者としても、コメ作りを主体とした整備を進めてきたと思っています。

一方、全国的には主食用米の需要が毎年８万トン減少し、本県でもコメ価格の下落や農業産出額の減少傾向が続く中、このままコメに特化・コメ頼みだけで良いのか、どのようにして所得を確保していくのか、コメ農家は売れる・売り切れるコメ作りをはじめ経営の見直しを迫られています。これからほ場整備を進めるコメ農家と我々が、区画を大きくするだけでいいのか、コメ以外にどんな品目を作ったらいいのか等々、これまで以上に真剣に議論し、将来に繋がる農業の展開を模索・実践する年にしなければなりません。

このような状況の中、本県では農業者の所得確保や本県の農業産出額を向上させるため、ほ場整備を契機とした園芸産地の育成・拡大に向けて、コメ作りの規模拡大や生産コストの低減に加え、経営の多角化・複合化など、これまでの発想を大きく転換させ、農林水産部と農地部が更に連携した取り組みを開始したところです。

「新潟はコメしか作れない！」なんていうコメ農家の意識が大きく変わり、若者の力も加わって、多種多様な農産物の宝庫になってくれればと願っています。ほ場整備によってコメ作りは少人数でも可能になりますが、園芸品目の導入となると労働力の確保や機械力等の問題もありますし、流通・販売となればJA等の力も必要となります。

現在、県内の各地域では、国営事業所やJAとも連携しながら、園芸産地化に向けて“種”を蒔いているところであり、少しずつ賛同者も増え小さく弱いながらも「芽」が出始めています。この大切な新芽を大きく立派に育てることが本県農業のポテンシャルや農業者の意識を高め、そして、将来に渡って農業県としての発展に繋がること、併せて数年後には新潟の風景も一変するような100ヘクタールを超える園芸メガ団地に育っていることを夢見ています。

以上、平成30年は、コメに限らず、園芸作物の導入等々、コメ農家はもとより、我々土地改良に携わる者にとっても大きな節目の年になると思います。しかし「言うは易く行うは難し」です。農業農村の持続可能性や農産物は単なる「モノ」でない観点から、コメ農家の心情にも配慮しながら、関係者１人１人が持っている数多の知識を集めて、将来への知恵として、コメ農家の心に響かせることが出来ればと考えています。

今後とも、農業者はもとより、土地改良区、JA、市町村、国としっかり意見交換しながら、地域が目指す農業が持続可能でさらに発展するよう事業を進めていきたいと考えていますので、引き続き、御理解と御支援をお願いいたします。

1haほ場での玉ねぎ栽培（柏崎市畔屋地内）